Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-07-13

# ラスキン・カレッジの1970年代における労働者の学習ー労働と生活の統合を通した尊厳の獲得ー

冨永，貴公

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2008-03-25
(Date of Publication)
2017-04-12
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲4283
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004283

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 冨永　貴公 |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士（学術） |
| 学　位　記　番　号 | 博い第 728 号 |
| 学位授与の　要　件 | 学位規則第 5 条第 1 項該当 |
| 学位授与の　日　付 | 平成 20 年 3 月 25 日 |

【 学位論文題目 】

ラスキン・カレッジの 1970 年代における労働者の学習－労働と生活の統合を通した尊厳の獲得－

審　査　委　員

| | | |
|---|---|---|
| 主　査 | 教　授 | 朴木　佳緒留 |
| | 教　授 | 宗像　　惠 |
| | 教　授 | 末本　　誠 |
| | 教　授 | 松岡　広路 |
| | 准教授 | 金野　美奈子 |

# 論文内容の要旨

氏名　　冨永貴公
専攻　　人間文化科学
指導教員氏名　　朴木佳緒留

## 論文題目

ラスキン・カレッジの 1970 年代における労働者の学習
—労働と生活の統合を通した尊厳の獲得—

## 論文要旨

本論文は，ラスキン・カレッジ（Ruskin College，在オックスフォード市）において 1966 年に発足したヒストリー・ワークショップ(History Workshop)を労働者の学習として捉え，そこでの 1970 年に同カレッジで開催された英国初の全国女性解放会議（ラスキン会議，the Ruskin Conference）の意義を明らかにすることを目的としている．

1899 年に設立されたラスキン・カレッジは，英国最古の労働者のための寄宿制カレッジであり，英国における学術研究の中心としてあるオックスフォード大学との連携のもとで高等教育が労働者に提供されてきたためか，リベラルな労働者教育の象徴的存在として位置づけられている．そのラスキン・カレッジで英国初の全国女性解放会議が開催され，第二波フェミニズムの起点となったことは，英国のみならず，本邦でも広く知られている．しかしながら，同会議でどのような議論が行われたのかについては明らかにされていない．このことを明らかにすることが本研究の第一の課題である．

さらに，開催地からラスキン会議と呼ばれる同会議が，なぜラスキン・カレッジで開催されたのかが問題となる．同会議がラスキン・カレッジで開催されたこと，そしてその起点が，歴史学ディプロマのテュータであったラファエル・サミュエル(Raphael Samuel)を理論的支柱として発足したヒストリー・ワークショップにあることは知られているが，この初の全国女性解放会議とヒストリー・ワークショップの関連については明らかにされていない．ラスキン・カレッジにおいて発足したヒストリー・ワークショップが，どのよ



うにラスキン会議の開催に結びついたのか，この問いに答えることが第二の課題である．

そしてさらに，なぜヒストリー・ワークショップがラスキン・カレッジで発足したのか，どのような活動を展開したのかを明らかにすることが第三の課題である．ヒストリー・ワークショップは，1979 年の全国大会を最後にラスキン・カレッジを離れ，英国各地に開催場所を移した．そもそも，ラスキン・カレッジの正規のカリキュラムではないヒストリー・ワークショップは，13 年を待たずとも，全国に活動の場所を移すことは可能であったはずである．それにも関わらず，ヒストリー・ワークショップが草創期において，同カレッジで開催された背景には何があったのか，この問いに対する答えは明らかでない．

小論では，上記の課題に答えるために，英国はブリティッシュ・ライブラリー（The British Library，在ロンドン），ウィメンズ・ライブラリー（Women's Library，在ロンドン，ロンドン・メトロポリタン大学図書館のひとつ），フェミニスト・アーカイブ・サウス（在ブリストル市，トリニティ・ロード・ライブラリー），同ノース（在リーズ，リーズ大学ブラザートン・ライブラリー内スペシャル・コレクションのひとつ）において，ラスキン・カレッジ，ラスキン会議，ヒストリー・ワークショップ，および，その発起人であるラファエル・サミュエルについての，資料収集を行った．それらの資料をもとに，ヒストリー・ワークショップにおけるラスキン会議の意義を実証的に明らかにする．

第 1 章は，ヒストリー・ワークショップが発足した 1960 年代，1970 年代における英国の労働者階級の変化，および，ラスキン・カレッジにおける学生運動による教育改革に着目し，そこでのカレッジ当局が提供する教育と労働者たちが求める教育，および，カレッジにおける彼らの学習が乖離していた状況を捉えようとしている．労働者階級の「ミドル・クラス」化をめぐって展開された「豊かな労働者」論の知見は，労働者による労働と生活の分離を指摘するものであったと．カレッジ当局が主導して行った労働学（Labour Studies）ディプロマ・コースの設置が，労働と教育の結合を企図したものであった一方で，学生たちが求めたのは，試験制度の改編と多様な学習内容の提供であったことから，彼らの経験，および生活と教育との結合であった．この意味で，労働と生活を分離するカレッジ当局の教育は，労働者たちが求めた学習と乖離したものであった．

第２章では，そのラスキン・カレッジの労働者教育における教育と学習の乖離を対象化して発足したヒストリー・ワークショップの意義を明らかにしようとする．ヒストリー・ワークショップは，経済と文化の間を経験にもとづいて把捉しようとする英国における社会史の展開を背景に，カレッジ当局が提供するカリキュラム，単位認定のための試験制度，学生に対する態度について，労働組合，労働運動における経験を多くがもつ，成人労働者であることに対する配慮を欠いていることを問題とし，教育のオルタナティブをつくる試みとして始められた．労働者の経験によって，労働者の歴史研究と労働者教育を統合しようとするものであったのである．教育と研究を学習者の視点から統合することを企図するヒストリー・ワークショップの活動理念は，労働者中心主義という政治性をもち，学習者の視点から，労働者をめぐる歴史と労働者教育に関わる知の再構成を行うものであった．

従来の労働史，および労働者教育における労働者の経験の欠如を対象化し，ヴィクトリア期の労働者の労働と生活をオーラル・メソッドにもとづいて明らかにすること加え，1973 年には，「歴史における女性」と題するワークショップを開催するなど，ヒストリー・ワークショップは，フェミニストの視点にもとづく歴史研究も展開した．この，歴史における女性の存在を可視化する視点がヒストリー・ワークショップに導入されたのは，ラスキン会議に帰結する同ワークショップでの議論を起点とするものであった．第３章では，このラスキン会議の内実とともに，フェミニズムとヒストリー・ワークショップの相互関係が明らかにされている．ラスキン会議は，当初，女性の歴史の必要にもとづいて企画された会合が，その準備段階において，ヒストリー・ワークショップ，あるいは，歴史研究という枠を外し，より一般的に女性のおかれている問題状況について議論する場に変化することによって成立したものであった．とりわけ，ラスキン会議が開催された 1970 年制定の平等賃金法をめぐる議論があり，そこでの平等賃金要求は，賃金という経済的な状況における差別を手がかりに尊厳（dignity）を求め，それを多様な女性解放の文脈に拡大した．こうして，ラスキン・カレッジにおける学生たちの学習を組織化し，教育と研究のオルタナティブを企図して発足したヒストリー・ワークショップ，そこでの議論を起点として開催されたラスキン会議に一貫して存在した価値は，労働者の労働と生活の分割不可能性であった．



ついで第４章以下では，以上のヒストリー・ワークショップとラスキン会議が共有した価値を踏まえ，同ワークショップにおける教育と学習の立体的把握を目指す．第４章では，ヒストリー・ワークショップの理論的支柱を担ったラファエル・サミュエルの論考における労働者階級を捉える視角を労働者教育における彼の学習者理解として整理，検討している．とりわけ，サミュエルの労働者の労働と生活を捉える視点が，ジェンダー関係に対してもった政治性を明らかにする．ラファエル・サミュエルによって問題とされた歴史における労働者の労働と生活の不可視とその可視化における一次資料，オーラル・ヒストリーの重視は，歴史研究という場，翻って，同時代的に公的な場の周辺に据え置かれた人々の経験を中心におくことを目指すものであり，そのことによって，彼らの尊厳の獲得を目指すものであった．その据え置かれた人々として取りあげられる存在は，男性労働者に限定されず，女性労働者の労働と生活を含み，そればかりか，労働と生活における男女間の差異をも対象化されていた．また，ラファエル・サミュエルは，記述のなかに分析が現出すると主張し，不可視にされてきた労働者の労働と生活に対し，受動的に応じることによって，教育者，および男性であることの権力や権威の自覚を示した．それは，教育と学習の場，とりわけ，歴史をめぐるそれらについて，その場を構成する人々の物語りがせめぎあう場として捉えれば，周辺に据え置かれた人々の経験に開かれた教育者の物語りであった．

こうしたラファエル・サミュエルの労働者の経験に開放された労働者教育において，実際の学習者はいかように応答したのだろうか．続く第５章と第６章では，ヒストリー・ワークショップにおける学習の成果として刊行された『ヒストリー・ワークショップ・パンフレット History Workshop Pamphlets』（全 13 巻）を取りあげ，そこでの自己と労働，および自己と生活に関する労働者学生の歴史記述を考察している．労働の過程そのもの，および労働をめぐる労働者組織に焦点を当てた歴史記述を取りあげる第５章では，その記述の特徴が３点に整理される．第一に，彼らが記述した労働が，労働者によって担われた労働を記述する，それまでの視角の範囲外に据え置かれていたものであったことである．第二に，労働者組織がその実，労働者の連帯のみならず，そこでの葛藤や矛盾，それゆえの分裂を含むものであったことを記述していることである．そして第三に，彼らが記述した労働は，彼らの生活と分ちがたく結びついていること，すなわち，それらの分割不可能性が記述されていたことである．

一方，第６章では，文化や家庭生活と自己を記述するパンフレットを取りあげて，その記述の特徴を４点に整理している．第一に，労働に関わる記述において見出された生活との分割不可能性は，生活に関わる記述においても同様に存在したことである．労働者が自己に関わって，労働，および生活を記述する際，いずれかを一方から分割して取り出し，記述することは，自己に関わっている限りで不可能なことであった．第二に，生活の場における他者との関係が記述されていることである．そこでは，労働に関わる記述の第二の特徴と同様に，利害，敵意に満ちた関係をも記述されていた．第三に，据え置かれた人々の生活に関わる記述において，非日常性に裏打ちされた祭りをテーマとするものが多く見られたことである．日常から逃れる非日常的な事柄が，労働者の生活として記述された．そして第四には，労働者学生によって記述された生活は，経済的，社会的な変化のなかにありながらも，存在し続けるつよさ，とでも言うべきものをもつものであったことである．外在的な要因によって，形式を失ってもなお，観念としてではあれ人々のなかに生き続け，時宜を得て，再び形をとるものとして生活は記述されていた．このように考えれば，生活という言葉は，労働と生活，というときの場所に限定された，すなわち，労働の場ではない地域や家庭を場として営まれる狭義の生活と，両者の分割不可能性にもとづいて，場所や時間，形式にさえも規定され得ない広義の生活とがあるように考えられる．

この広義の生活こそが，労働と生活の分割不可能性を生きる自己，およびその分割不可能性を記述することによって獲得される尊厳の担保となるものだと考えられる．第７章では，第５章，第６章において検討した労働と生活をめぐる労働者の記述を総括的に検討するとともに，歴史記述を通じた彼らの尊厳の獲得の実際について，明らかにしている．労働者学生による歴史記述は，まず，その他者とともにある生活と労働における自己を他者との対話が可能なかたちで記述することによって，その書き手に尊厳の獲得を保障するものであった．歴史記述を通じて，労働者学生たちは社会に据え置かれているのだという意識を言語化し，それを他者に開くことによって，他者との関係のなかで尊厳を獲得した．さらに，その歴史記述は，それまでの歴史的事実を把捉する眼差しに対するオルタナティブとしてあったことによる尊厳の獲得も存在した．歴史という学問領域において，「記憶の聖なる次元」を含み込んだ労働と生活における自己の示す価値を認識し，記述することによって，労働者学生は尊厳を獲得したのである．確かに，労働と生活における自己が，



完全な記述可能性をもたないことは事実である．労働と生活における自己の記述は，自己を記述しようとする限りにおいて，記述しない，あるいは記述できない自己を生みだしもする．その記述は，非匿名化しながら匿名化する過程となり得るのである．しかし，この記述可能性と不可能性の境を定める眼差しが，労働と生活を記述する，その自己に委ねられていることによってもまた，尊厳の獲得が保障されていたのである．

ラスキン・カレッジとヒストリー・ワークショップの関連とそこでのラスキン会議の意義を明らかにすることを通じて明らかになったことは，以下の３点に整理される．第一に，学習者の経験を中心に据えて，教育のオルタナティブを求めたヒストリー・ワークショップの活動が，労働者の労働と生活の分割不可能性にもとづく，労働者の知の再構成を行うものであったことである．そしてまた，労働者による知の再構成に際して，教育者は彼らの経験に対し，受動性をもって応答した．労働者の経験に対する教育者の受動性という物語りは，自律を強制的に求める教育のアポリア，および労働者教育におけるジェンダー視点の導入というコンフリクトに対し，学習者の物語りにただ耳を傾けることの意義を示した．その耳を傾けることの内には，権力，および権威に関わる自己の立場の自覚が存在していた．そして第三に，教育者の受動性は，他者への自己の開放としてあったのであり，労働者学生たちもまた，差異を把捉するのみならず，他者とともにある自己を記述するなかで，他者への自己の開放をなし，それまでの学問的な知を超え，労働と生活に引き裂かれない，意味ある自己を見出した．このことによって，ヒストリー・ワークショップは，参加する労働者の尊厳の獲得を保障するものであった，というのが本論の結論である．

確かに，開放の労働者教育としてのヒストリー・ワークショップの今日の展開が，教育と学習としてよりもむしろ，研究に傾斜しているのも確かである．しかし，労働と生活の分割不可能性にもとづき，他者に開かれたかたちで学習者の尊厳の獲得を保障する労働者教育のありようは，ジェンダー視点と「大きな物語」にもとづく労働者教育を超え，両者を結合させたかたちで「小さな物語」を紡ぎだす労働者の学習の意義を示した．

［課程博士用］

# 論文審査の結果の要旨

| | | | |
|---|---|---|---|
| 氏　名 | 冨永　貴公 | | |
| 論文題目 | ラスキン・カレッジの1970年代における労働者の学習<br>－労働と生活の統合を通した尊厳の獲得－ | | |
| 判　定 | (合　格)・不　合　格 | | |
| 審査委員 | 区　分 | 職　名 | 氏　名 |
| | 主　査 | 教授 | 朴木　佳緒留 |
| | 副　査 | 教授 | 宗像　惠 |
| | 副　査 | 教授 | 末本　誠 |
| | 副　査 | 教授 | 松岡　広路 |
| | 副　査 | 准教授 | 金野　美奈子 |

要　旨

本論文は英国のラスキン・カレッジにおいて1966年に発足したヒストリー・ワークショップでの労働者の学習及び1970年に同カレッジで開催された英国初の全国女性解放会議（ラスキン会議）の内実と意義を明らかにすることを通して、ジェンダー視点から、労働者教育・学習論の在り方を考察、展望することを目的としたものである。

ラスキン・カレッジにおける労働学デプロマコースの設置、またラスキン会議が英国における第二派フェミニズムの始点であったこと等は先行研究により明らかにされている。しかしながら、ラスキン・カレッジにおける労働者学生の学習要求の実際、また、ラスキン会議の内実は明示、検討されていない。

本論文ではこの点に着目し、ブリティッシュ・ライブラリー、ウィメンズ・ライブラリー、フェミニスト・アーカイブ・サウス及びノース等の現地の資料館において資料を収集し、実証研究を行うとともに、ジェンダー視点からの労働者教育・学習論の構築を展望した。

具体的な課題は、第一にヒストリー・ワークショップの活動内容を明らかにすること、第二にラスキン会議で行われた議論の内実を明らかにし、英国初の全国女性解放会議がなぜラスキン・カレッジで開催されたのか、また同会議とヒストリー・ワークショップの関連を探求、考察することにある。そして、第三にラスキン会議とヒストリー・ワークショップを労働者の学習の視点で結び、実証的検討を通して、ジェンダー視点からの労働者教育・学習論を考察することにある。

論文の構成と概要は以下である。

第１章では、1970年代の「豊かな労働者」論争を整理した上で、労働者学生がラスキン・カレッジにおいて求めたものは、労働学ディプロマコースのような労働そのものを対象とした教育では必ずしもなく、自らの労働と生活の経験を基にした試験制度の改編であったこと、その点で大学当局の教育論と学生の要求は乖離していたことを明らかにした。第２章では、労働者学生の要求に応えるものとして始められたヒストリー・ワークショップの内容を具体的に取り上げて、そこでの学習及び研究方法が労働者学生の経験に添うものであったことを示しつつ、同ワークショップは労働者教育と歴史研究を労働者の視点で改編するための試みであったと意義づけた。第３章では、「下からの歴史」の創造を目指したヒストリー・ワークショップが、実は男性労働者を中心としたものであり、それへの異議申し立てとしてラスキン会議が成立したこと、また、ラスキン会議では議論百出し、一定の「解」が得られたわけではないが、女性労働者たちは労働についての「尊厳」を基に、女性差別の是正を主張したことを明らかにした。第４、５、６章では、ラファエル・サミュエルによるヒストリー・ワークショップで行われたサミュエル自身及び労働者学生による労働経験、生活経験についての歴史記述を具体的に取り上げ、労働者学生が労働者の「生きられた経験」を学習対象とし、オーラルヒストリー等の研究方法を用いたことにより、社会と自分自身を理解し、自らの尊厳を獲得する学習が行われたことを明らかにした。また、歴史の「大きな物語」によっては得ることが難しい認識の獲得可能性について考察した。第７章では、上記の論述をふまえて、ジェンダー視点による労働者教育・学習は単に女性及び女性労働を対象化することによって成り立つわけではなく、労働と生活の分割不可分性を捉える視点を包含すべきこと、また他者の尊厳を担保として自己の尊厳を獲得できるような内容と方法、道筋が必要であることを考察した。

本論文は実証研究をふまえつつ労働者教育・学習論の在り方を考察するという体裁をとっているため、実証研究としては一定の限界があるという問題を残しているが、現地調査による資料をふまえて、ラスキン会議とヒストリー・ワークショップの関連を明らかにした点、同ワークショップの労働者教育・学習の意義について、ジェンダー視点から考察を加えた点でユニークであり、ジェンダー視点を含めた今後の労働者教育・学習論の展開について重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。よって、学位申請者の冨永貴公は博士（学術）の学位を得る資格があると認める。

なお、提出された参考論文は以下である。各々審査を経たものであり、本論文を提出する要件は充分に満たされている。

（１）「ラスキン・カレッジのカリキュラムおよび試験制度への学生の関与―1960年代のAffluent Workers論への対抗的価値―」『神戸大学発達科学部研究紀要』第14巻第２号（2007）, 89-95.

（２）「英国における第二派フェミニズムの起点―ラスキン会議における男女平等賃金をめぐって―」『女性学』Vol.14 (2007) 68-71.

（３）「ラスキン・カレッジにおける1970年代のヒストリー・ワークショップ―ラファエル・サミュエルによる男女に開かれた労働者教育の起点―」『日本社会教育学会紀要』No.43 (2007) 41-50.

（４）「三池主婦会による家庭民主化の展開―生活の多元性に基づく労働の問い直し―」『神戸大学発達科学部研究紀要』第13巻第１号（2005）, 39-48.